

カンボジア農村部および都市部の学校教育に関する調査研究 —小学校と幼稚園に着目して—

仲 井 勝 巳
(教育学科)

筆者は、2024年8月に、カンボジア農村部および都市部にある学校を訪れて授業を視察した。また、農村部の地域住民（村長含む）、JICA関係者にインタビュー調査を行った。その結果、農村部の小学校（1～3年生）では、主に国語（クメール語）と算数を学び、理科や社会、伝統を適宜学んでいることがわかった。幼稚園では、教員が指導内容を工夫し、歯磨き指導を実施していた。また、2022年頃に給食（朝食）が出されるようになり、就学率が上がったと推察される。農村部の調査から、主に子ども達が小学校に通えるようになって良かったこと、村に中学校まででき、教室が増えてほしいことの意見を住民が持っていることがわかった。農村部と都市部の学校は、主に座学が中心であるため、理科などの授業で、観察・実験を取り入れると、子ども達のより良い学びが期待されることを提言した。

キーワード：カンボジア、農村部と都市部、学校教育、小学校、幼稚園

1. はじめに

外務省¹⁾によると、カンボジア王国（以下、カンボジアと表記する。）の面積は181,035km²、首都はプノンペン、民族は人口の90%がカンボジア人（クメール人）とされている。言語は、クメール語で、宗教は仏教（一部少数民族はイスラム教）とされている。特に1975年～1979年頃、ポル・ポト政権下で多くの人々が虐殺された。その背景から、学校教育に関しては、学校がそもそもない、学校があっても教員がいない、子ども達は学校に行かず親の仕事の手伝いをしなくてはいけないなどの課題があった。その後、政権が変わり、2023年には、フン・マネット政権が発足した。現在は、都市部を中心に経済的な発展が進んでいる状況である。また、これまでに日本は教育関係などの援助²⁾を行っている。

筆者・仲井（2020・2021a・2021b・2023）は、2009年12月に初めてカンボジアを渡航した際、農村部の学校建設に携わったことがきっかけで、その後、継続的に教育活動等に関わり報告してきた。例えば、農村部の小学校や幼稚園において、筆者の小学校教員の実務経験を活かし、科学教育（紙コップタワー・糸

電話の作成）や環境教育（石けんと合成洗剤について）と現地の課題に対応した教育活動に取り組んできた。2020年1月頃にカンボジアの調査を最後に、新型コロナウイルスの影響で、現地の活動ができなかった。その期間は、カンボジアの支援団体へインタビュー調査（オンライン）を行い、農村部の教育活動では、小学校教員が小学校の教室や隣接した青空教室で、幼児教育を担うことを調査してきた。

木下・桑山（2013）は、カンボジア復興支援プロジェクトにおいて、カンボジアの小学校教員養成課程に所属する教員や小学校教員に授業研究や理科の授業構成および教材開発、授業研究会の持ち方などを指導した。その結果、小学校教員は、作成した学習指導案や教材、授業展開を事前に教員集団で吟味・修正し、実際に授業をし、設定した視点で協議するという授業研究の手法が獲得したことを示した。また、養成校の教員は、計画的に教材研究や模擬授業などを行い、近隣小学校教員に対して授業提案をすることができたことを示した。しかし、現地教員がこの復興支援プロジェクトに依存する課題や支援が必要のない状況下で質を深めていくことができるかを課題として挙げている。

以上のことから、内戦後に多くの国や地域がカンボジアへ支援活動に取り組んできたが、その支援事業（特に教育分野）の撤退後、継続性の課題が指摘されている。つまり、授業を研究するという教員側の研究会などの仕組みがまだ整備されていないということが要因として考えられる。そこで、カンボジアの学校では、どのような学校教育（理科含む）が現状実施されているのかを明らかにした上で、現地に必要な教育活動の展開を考察することが重要であるといえる。よって、本研究は、コロナ禍後、筆者がカンボジアの農村部と都市部の学校現場を訪れて、カンボジアでフィールドワークを行い、学校教育の現状と課題を明らかにすることを目的としている。

2. 研究方法

2024年8月にシェムリアップ州の農村部にあるA小学校・幼稚園（A小学校は、筆者が学校建設で携わった）や都市部のB小学校（JICA海外協力隊員で算数教育を専門としている日本人教員）、C小学校（JICA海外協力隊員で、図画工作科教育を専門としている日本人教員）を訪問した。そして、授業を視察し、現地カンボジア教員やJICA職員、JICA海外協力隊員にインタビュー調査を実施した。また、S村の学校付近の地域住民や村長にインタビュー調査を実施した。農村部と都市部で視察した授業やインタビュー調査の内容を筆者自身の実務経験（小学校教員11年間の経験）や専門性（主に科学教育）を基にカンボジアの学校教育の現状と課題について考察した。本研究は、倫理的配慮を行い、調査を実施した。

3. 農村部のフィールドワークの結果と考察

3-1. 農村部のA小学校・幼稚園の授業視察

農村部にあるA小学校（1～3年生）・幼稚園（年中・年長）を訪れた。児童数は165人で、2つの校舎からなり、小1（39人）、小2（26人）の教室、幼稚園（年長31人・年中26人）と小3（27人）の教室が配置されていた。それぞれのクラスの様子（図1）を視察し、子ども

達がどのような学びをしているのかを調査した結果と考察を行う。

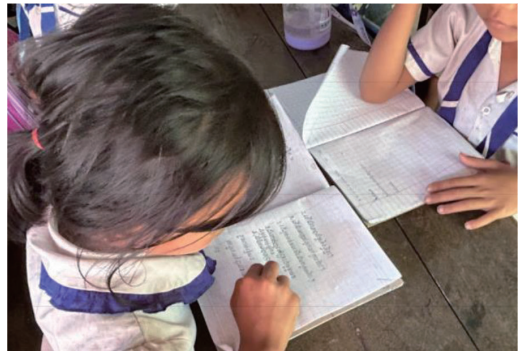


図1 農村部の授業

小学校では、月曜日から土曜日まで学校があり、主に朝7:00～11:00まで（午前中のみ）授業がある。ただし、木曜日の後半9:00～11:00は掃除の時間となっている。そして、座学が中心で、主に国語（クメール語）と算数を学び、理科（校庭の作物）や社会（方位のことやトンレサップ湖にはたくさんの種類の魚がいるため大切にすることなど）、伝統に関しては、適宜学んでいることがわかった。教員が力を合わせて、理科の教材に関係するキュウリやヘチマなど（図2）を、授業を自習にしている間に準備していた。キュウリ、ヘチマ、インゲン豆、パクチーなどを植えて、育ったものは食材にして、子ども達に紹介することがわかった。自習にしている間は、子ども達の集中力が続かない様子も見られた。立ち歩く子どもも一定数いたが、野菜の準備を終え、教員が教室に戻ると授業は再開された。子ども達の集中力が続かない場合は、教員は手遊びを取り入れて授業に集中させるなどの工夫をしていることがわかった。



図2 理科教材のキュウリやヘチマ

小学3年生（27人）の教室において教員の許可を得た上で、通訳を通し、児童に次の質問をした。「教科は好きですか?」という問いに対し、「好き」と回答した児童は、算数26人/27人、国語3人/27人、理科15人/27人、社会20人/27人の結果を得た。さらに、理科が好きな理由として、「加工の仕方や村の畑の野菜を学ぶことができるから」、社会が好きな理由として、「カンボジアの国旗を学んだから」という回答を得た。小学3年生の社会、理科（舞踊、生活など）は、一緒にの教科になっていた。このクラスの教員も、子ども達の集中力を持続させるために、手遊びを入れるなどの工夫を取り入れていた。後日、教員はアンコールチョムの研修に参加するため、学校は休校となる。そのため、児童は宿題が普段より多くなることを知ると元気がない様子であった。

幼稚園（年長組）では、教員が指導内容を考えて取り組んでいた。例えば、国語の子音を1日1文字書いて覚えること、朝食後の歯磨き指導をしていることなどが挙げられる。また、小学4年生以降は隣村の小学校へ通うことになっている。

授業視察の放課後、小1、小2クラスで成績上位4名が残って教員から指導を受けていた。その理由は、近隣の学力テストのコンテストを受ける児童を、その4名の中から3名を選ぶためであることがわかった。また、シェムリアップ州の農村部では、2022年頃に朝食が小学校や幼稚園で支給されるようになっていた。

3-2. 農村部の地域住民への調査

2024年8月24日および28日に、シェムリアップ州にある農村部の地域住民へ、インタビュー調査を行った。インタビュー調査時間は、各10～20分程度を実施した。インタビュー調査の結果内容を、a：学校、b：給食（朝食）、c：家族、d：子どもの将来、e：仕事、f：戦争、g：識字の内容が読み取れるものをそれぞれ分類した。そして、その結果をインタビューの協力を得た村人の順番に整理した（表1）。

表1の結果から、主に小学生の子ども達は学校に通うことが楽しく、勉学にも興味を持っているが、算数は好きで国語が苦手な傾向があった。また、小学生の将来の夢として、主に学校教員が挙げられ、一部、医者になりたいことがわかった。これは、農村部では、主に住民は農業や建築、学校関係の職業を知る機会が多く、都市部の子ども達と比べ、多様な仕事があることを把握していない要因が考えられる。

一般女性、一般男性、一般夫婦からは、幼児や小学生の子ども達が学校に通って学ぶこと、給食（朝食）が支給されることに対して喜びを持っており、さらには、中学や高校まで進学を希望していることもわかった。特に給食（朝食）に関しては、「母親として、朝ごはんが出て、子どもはお腹を空かさなくて食べられるから嬉しい。」（村人⑭）の意見に着目すると、子どもを学校に通わせる保護者の理由として、子どもの空腹を満たせることを挙げていたことから、地域住民は朝食を食べる傾向がないと推察される。そのため、学校で給食（朝食）が支給されることで栄養が取れることに期待しているのではないかと考えられる。

また、年配の女性達や一般夫婦で年齢を重ね、戦争の背景（ポル・ポト政権による不安定な時期）から、そもそも学校がなくて勉強できなかったこと、家の手伝い（農業の仕事）やタイと一緒に出嫁ぎに行って学校に通えなかったことから、字が読めなかったり書けなかったりしている。そのような背景を持つ家庭に関しては、子どもや孫が学校に通うことを願っている

傾向があると考えられる。また、農村部の仕事は、主に農業が盛んで、農業が落ち着いた収穫終了時期に学校が始まるが、同時に農業に関する仕事が少ないため、家族と一緒にタイへ出稼ぎに行ってしまうこともある。農村部では木造の高床式の家屋（図3）が建っており、タイなどに出稼ぎに行き金銭を手に入れたら、家屋を補強したりレンガ造りに建て直したりすることもわかった。現在は、タイに出稼ぎに行く際に、祖父母に子どもを預けることが可能な家庭は、子どもが学校に通うことができる。しかし、かつては家族と一緒にタイに出稼ぎに行っていたため、家庭状況によって大人の識字率は異なることが考えられる。



図3 農村部の主な家屋（高床式）

次に、2024年8月28日、シェムリアップ州農村部にあるS村の村長へインタビュー調査を40分程度行い、以下に示した。重要な箇所には、筆者が下線を引き、地域住民と同様にインタビュー調査の結果内容を、a：学校、c：家族、e：仕事、f：戦争の内容が読み取れるものをそれぞれ分類した。

以下：

村長60代（男性）は1968-1970年頃まで、隣村で学ぶことができたが、1971年以降は学ぶことが難しかった（b）。1983年に牛が踏んだ地雷の破片で右目を失明し、腹、肩あたりも怪我をした。村長の祖父も地雷で亡くなった。ポル・ポト軍が、隣村の学校やお寺などを破壊した（c・f）。この村に学校や工場ができ、子

ども達や孫達が学校に行に通っていることが嬉しい（b）。昔、国王の軍隊、ベトナム軍、ポル・ポト軍隊があった。ポル・ポト軍はタイ国境あたりに行き、地雷をたくさん埋めた。時代背景により、ポル・ポト軍に2年ほど従事しなければ生きていけないことがあり、その結果、ベトナムの刑務所に6ヶ月程入ることもあった。国王の軍隊によって助けてもらい、ベトナム軍の刑務所を出ることができた（f）。他の人を見せしめて捕まることがあったため、村長になろうとする人はほとんどいなかった。そのため、村長になった理由は、誰も候補者がいなく、それでも村のことを考えて、自分の意志で村長になることを決めた（e・f）。幼稚園に通いたい子どもがいる家庭に、村長がスピーカーで案内を行うことがある。11月に小学校と幼稚園はスタートする。稲作が終了後に、学校が始まることが多い。子ども達の進級テストは10月にあり、厳しい場合は留年することがある（a・e）。現在の村長の願いとして、中学校の校舎があったら嬉しいが、購入できる土地がないことが課題である。しかし、小学校があるおかげで、子ども達は勉強をしっかりとるようになっている（a・d）。

村長のインタビュー調査の結果から、戦争の不安定な時期では学校に通えなくなったり、地雷によって傷害を負ったり、家族を失ったり、従軍したことで投獄されたりした背景を持っていることがわかった。ポル・ポト政権時代の不安定な時期において、学校教育の大切さを願い、農村部に学校ができ、子ども達が学校に通い学んでいることに対して喜びを持っていた。そして、小学校や幼稚園への入学案内を村長として行い、さらに、より教育が充実し、広く子どもの将来に関する願いも持っていることが明らかになった。当時、不安定な時期に村長になろうとした意志がこの村を大きく支える存在になったのではないだろうか。

よって、今後、この村の住民が多くなれば、必然的に校舎や教室の数の必要になるだろう。現状は、幼稚園や小学校3年生までしか通えない状態であるが、教育の公平性の視点から、小

学4年生以上の子ども達や中学生以上の子ども達が通えるような学校の整備、教室の部屋数もさらに必要となってくると推察される。

4. 都市部のフィールドワークの結果と考察

4-1. 都市部のB小学校の授業視察

シェムリアップ州の都市部にあるB小学校は大規模校で、午前と午後の授業に分かれている。教員と児童も午前と午後で入れ替わることになっている。B小学校は、JICAに小学校算数教育の要請し、主に算数（割り算）を苦手とする児童への算数授業（少人数・12人）の取組について視察した（図4）。その結果、日本で小学校教員としての実務経験を持っているJICA海外協力隊員の授業から、プロジェクターを使って、その回答になる計算式を見つけたり、班活動で意欲的に取り組んだりするような工夫をしていた。カンボジアでは、留年制度があるため、参加した児童の年齢は様々であった。全体授業やワークショップ後に、課題プリントを個々のペースで取り組んでいた。

JICA海外協力隊員から授業について確認すると、「普段はもっと賑やかであるが、今日は先生方が見に来られたため静かに頑張っており、取り組んでいました。」という意見を得た。また、現地では、理科の授業に関しては、ほとんど観察・実験を取り入れた授業はなく、座学が主であることを確認した。小学校内に幼稚園があり、この小学校近隣には、中学校や高等学校もあった。高等学校には、バイク置き場が確保されており、多くの高校生はバイク通学をしている。なお、一部、小学生もバイク通学している児童がいる実態もあった。なお、このB小学校（幼稚園含む）では、給食（朝食）の支給は行われておらず、多くの児童や教職員は校内の売店で、ご飯を買って食べることがわかった。



図4 都市部の授業（算数・少人数）

4-2. 都市部のC小学校の授業視察

シェムリアップ州の都市部にあるC小学校は大規模校である。B小学校と同様に、午前と午後の授業に分かれており、教員と児童も午前と午後で入れ替わることになっている。C小学校は、JICAに小学校の図画工作科教育を要請し、主に図工の授業を現地に合わせて構築することを目的としている。その図工の授業（55名）を視察した（図5）。その結果、日本で小学校教員としての実務経験を持っているJICA海外協力隊員の授業から、プロジェクターを使って、「コマづくり」の全体説明を行い、次に、紙皿に定規を使って線を引き、ハサミで切り、その場所を折り曲げてコマのようにして作成していった。作成後は、机や教卓付近の広い場所でコマを回したり、友達とどちらが長く回っているのかを競ったりして遊んでいた。この図工の授業に関しては、特別教室を作り、その場所で、各クラスの児童が授業を受けるために移動するようにしていた。そのため、教材やプロジェクター機器などを設置して、準備をしっかりと取り組むことができるように工夫されていた。

このC小学校も校内に幼稚園があり、地域の子ども達が通うことになっている。ただし、給食（朝食）に関しては、B小学校と同様に支給されていないことがわかった。

以上のことから、カンボジア都市部のJICA海外協力隊員（小学校教育・算数・図工）の授業を視察した。結果、都市部の教育はICT機器などが充実し、学校の規模が大きく、近隣に中学校や高等学校があり、子ども達は通いやすい傾向があるのではないかと推察される。また、



図5 都市部の授業（図工）

JICA海外協力隊員が関わる学校では、要請された科目（算数・図画工作・体育）が充実しつつある。しかし、理科などの科目は、実験を取り入れた授業構築は常に展開されておらず、座学が中心である。そのため、理科では体験活動を通じた理解のある授業構築に課題があるのではないかと。JICA海外協力隊員が配属された学校においては、一部、理科の実験を取り入れた授業に取り組んでいるが、常に観察や実験を取り入れた授業やカリキュラムではないことが考えられる。

今回の視察は、都市部の小学校でJICA海外協力隊員の授業のみとなっているため、普段の現地教員の授業を視察したわけではない。また、特別授業の位置づけとしての視察やJICA海外協力隊員、関係者からの情報であるため、現地教員が実際にどのように授業をしているかを明らかにしていない。よって、時間をかけて都市部における学校で行われている普段の授業を視察し、明らかにする必要があるといえる。

5. 総合考察と今後の課題

本稿は、2024年8月に、コロナ渦に筆者がカンボジア農村部および都市部にある学校を訪れ、実務経験（小学校教員11年間の経験）や専門性（主に科学教育）を基にフィールドワークを行い、学校教育の現状と課題について考察したものである。これまでに農村部の学校建設から関わり、カンボジアを訪れて特別授業などに取り組んできたが、本研究において農村部の地域住民（村長含む）にインタビュー調査を行っ

たことは、初の試みであった。特に調査した農村部の小学校（1～3年生）および幼稚園（年中・年長）では、小学校では、座学が中心で、主に国語（クメール語）と算数を学び、理科や社会、伝統を適宜学んでいることがわかった。また教員がキュウリやヘチマなど、理科に関する教材を協力して準備していた。しかし、理科に関しては、教科書の学習は主に座学が中心であり、理科室などの特別教室はなかった。このことから、理科の観察・実験を取り入れた授業構築に課題があるといえる。幼稚園では、教員が指導内容（国語の子音を1日1文字書いて覚えることなど）を考え、朝食後の歯磨き指導を行い、健康面の指導を大切にしていることが明らかにになった。

また、学校に通わせている保護者、地域住民、村長にインタビュー調査を行った結果、農村部の小学校および幼稚園では、2022年頃に朝食が出されたことにより、就学率が上がったと推察される。そして、地域住民は、子ども達が学校に通えるようになって良かったこと、村に中学校までできてほしいこと、教室を増やしてほしいことの見解を持っていた。ポル・ポト政権の不安定な時期では、学校が存在せず学ぶことができなかった結果、字が読めずタイに出稼ぎをして生活しなくてははいけないこともあった。現在は、農村部に学校ができたことによって、特に学校へ通うことができなかった家庭は、子どもや孫に学校へ通わせたいという思いを持つ傾向があることがわかった。

今回調査した都市部の小学校は、筆者自身初めてシェムリアップ州の大規模校を訪れたことになる。JICA海外協力隊員による授業（算数・図工）は、普段の現地教員が指導する内容とは異なる。そして、現地校の要請課題に合った授業として、ICT機器の活用や図工室などの特別教室が設置され、より良い教育の実践の試みが展開されていることを把握した。農村部の学校と比べ、訪れた都市部の学校へ通学する子ども達の人数は多い傾向にあった。幼稚園は小学校内にあり、農村部と同様であった。しかし、都市部では給食（朝食）が提供されておらず、農

村部では給食（朝食）が提供されることから、農村部の就学率が上昇しているのではないだろうか。その裏付けとして、この調査をした農村部の地域住民が、給食（朝食）で、子どもの空腹が満たされることの期待が要因として考えられる。また、農村部のほうが都市部と比べて、子ども達の人数が少なく、午前中で授業が終わること、そして、村長が地域住民の状態を把握しやすく、就学について案内していることから、農村部の就学率が良くなっていると推察される。

今後の課題として、本研究は、農村部や都市部にある特定の学校における調査であることが指摘される。しかしながら、農村部と都市部では、給食（朝食）の有無に関することがわかった。また、農村部では、なかなか特別教室などの設置が難しいことがわかった。そして、農村部特有の課題として、農業が中心の仕事であるため、タイに出稼ぎにいく家庭がある。しかし、ポル・ポト政権の不安定な時期後の学校建設後の農村部における地域住民は、学校教育に期待している。そのため、今後、農村部の学校教育のさらなる充実にも期待がされる。現状では、学校の規模、教室数に限りがあるため、教員の指導方法の工夫が求められるだろう。よって、特別教室がない場合でも、例えば、理科などの授業で、観察・実験ができるような内容を考案することで、農村部の教育は期待されるのではないだろうか。そのためにも、カンボジアの理科に関する教材分析を行い、教室でも観察・実験を行えるような授業の提案が必要である。また、都市部においても、座学中心の授業の傾向であるため、特別教室が設置できない場合、農村部と同様に、教員の指導方法を工夫することが重要だといえる。今後、教員養成校や

現地の学校教員と協同して、現地に合った理科などの授業案を検討していくことで、子ども達へのより良い学びになるのではないだろうか。

注

- 1) 外務省「カンボジア基礎データ」のカンボジアに関する資料を引用した。<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.html#section1>（2024年10月11日確認）
- 2) カンボジア「海外での取り組み—JICA」の資料より、これまでに日本は「教員養成大学建設計画」「理科教育改善計画プロジェクト」などの支援を行ってきた実態が。 <https://www.jica.go.jp/overseas/cambodia/index.html>（2024年10月11日確認）

参考・引用文献

- 木下博義・桑山尚司（2013）「カンボジアの理科教育支援に関する事例的研究」, 学校教育実践学研究（19）225-235.
- 仲井勝巳（2020）「カンボジア農村部の小学校における科学教育・環境教育の試み」日本科学教育学会年会論文集（44）, 643-646.
- 仲井勝巳（2021a）「カンボジアの幼稚園・小学校における科学教育の試み：農村部でのフィールドワークを通して」, 聖学院大学論叢（33）, 第1・2号合併, 1-16.
- 仲井勝巳（2021b）「カンボジア農村部におけるSDGsエコビレッジに関する考察：法人代表者へのインタビュー調査と報告資料から」尚美学園大学総合政策論集（33）, 51-60.
- 仲井勝巳（2023）「カンボジア農村部の支援活動に関する考察：2022年度に実施した支援者の調査から」, 尚美学園大学総合政策論集（36）47-52.

謝辞／付記

本研究を実施するにあたり、カンボジアで活動しているNPO団体やJICA職員、JICA海外協力隊員の皆様からご協力をいただきました。感謝申し上げます。また、本研究は、京都女子大学令和6年度研究経費助成を受けた。

カンボジア農村部および都市部の学校教育に関する調査研究

表Ⅰ 地域住民への調査結果

番号	対象者	2024/8/24および8/28に実施した村人へのインタビュー調査内容（通訳を通して得た情報）	分類
村人①	一般女性	「祖母（対象者）、母親、子ども7人、孫が何人か住んでいる。プノンペンなどの都市で学んだり、働いたりしている。今3歳児で、母親も忙しいから、そろそろ幼稚園へ行かせたい。母が忙しいから行かせたい。子どもが来週から幼稚園に入ることや朝ごはんが出されることは嬉しい。朝ごはんは、隣村の小学校から配給されて助かっている。小学4年生の姉がおり、高校まで勉強して、将来小学校の先生になりたいと言っている。」	a.b.c.d.e
村人②	小3女兒	「勉強で算数が楽しいが、クメール語は難しいからあまり好きではない。先生が大好きだから、自分の村で将来は先生になりたい。」	a.d
村人③	小3女兒	「勉強したいから学校は楽しい。宿題は、算数が多い。クメール語は難しいから、苦手。先生になりたい。医者にはならない。朝食は美味しい。クーンサイなど野菜炒めが好き。」	a.b.d
村人④	小5女兒	「国語、算数、理科、社会を勉強している。先生になりたい。」	a.d
村人⑤	小4女兒	「先生になりたい。」	d
村人⑥	小2女兒	「医者になりたい。」	d
村人⑦	一般女性	「小3と7ヶ月の幼児がおり、幼稚園に行くのが楽しみである。子どもは学校が楽しいと言っている。村の中に学校があって便利である。自分の子どもが中学校まで勉強できるからありがたい。」	a.c
村人⑧	一般男性	「子どもの時に戦争があった。軍隊が来ていた。小5で学校を辞めた。学校を辞めたけど、勉強したい。自分の家族問題で、畑の仕事を手伝わないと暮らしていけなかった。文字は少しだけ読める。」	a.e.f.g
村人⑨	一般女性	「学校に通ってなかった。お金がなくて学校に行けない。家の手伝いをするため、当時は、学校に行くことと父母に怒られた。最近では、自分の子ども達には行って欲しい。今はタイに出稼ぎに行くが、親戚に子どもを預けることが多くなった。タイの仕事はしっかりと給料をもらえる。ここで産業が起これば、給料をもらいながら働けるからありがたい。」	a.c.e
村人⑩⑪⑫⑬	年配の女性達	「子どもを学校に通わせてどうか？」という質問に対し、「村に学校があるから、自分の子どもが遠くに行かなくて良かった。みんな（4人）は、カンボジア語（クメール語）がわからない。戦争の時は大変で、学校がなかった。学校がない時は、菩提樹の木の下で勉強していたが、先生のことを知っている、ボル・ポト軍が来て逆殺していった。畑で収穫した米などは、ボル・ポト軍に渡さなければいけなかった。お米を食べることができなかったが、お粥は作って食べることができた。」	a.f.g
村人⑭	一般女性	「カゴ一個1.5ドルで作成するが、若い人は1日2つ作っている。村の子どもが多いので、教室が足りないことがある。もし自分の土地があればあげたい。孫達は、学校が楽しいと言っている。学校が優先で、子ども達は、午後、農業（野菜、畑、豚の餌やりなど）を手伝う。公園がないので、子どもの遊び場が欲しい。校庭、遊具みたいなのがあれば嬉しい。時々、市内に行って公園に遊ぶことがある。アンコールワットなどの遺跡には、みんなで行きたい。昔、アンコールワットへ日本人が村の人を5人くらい連れて行ってくれた時が嬉しかった。お正月は、現地の人もアンコールワットに行くことが多い。新品の服で行く。夜は8時か9時に寝て、起きるのは5時くらい。朝ごはんが出るようになって、子どもは嬉しい。母親として、朝ごはんが出て、子どもはお腹を空かさなくて食べられるから嬉しい。朝は学校、昼、と夜は家で食べる。焼き鳥が人気であるが、値段は高い。豚肉は安価で、食べやすい。家では、肉は高いので、月に1回～2回程度しか食べない。育てた野菜や川から捕まえた魚を食べる。この村の学校で学ぶと、字が読めるし書けるから嬉しい。ボル・ポト政権で勉強できなかったから、字は読めない。高校まで通っている村の子もいる。片道、10キロくらい。」	a.b.c.e.f.g
村人⑮⑯	一般夫婦	「字が読めない。戦争で学校がない時は、木の下で勉強した。文字が読める人が先生として教えてくれた。村では、文字が読めない人が多い。アンコールワットに行きたい。雨があまり降らないから畑が少し困っている。魚を捕まえるカゴを作り、魚やカエルをとっている。15年前に、子どもは小学校に通って卒業した。子どもは6人中、5人が卒業し、タイに出稼ぎに行ったり結婚したりした。学校ができて、子どもや孫が勉強して嬉しい。村では、携帯電話のアンテナが欲しい。」	a.c.d.e.f.g
村人⑰	一般男性	「字は読めない。当時は、家族と一緒にタイに出稼ぎ行っていたから学校に通っていなかった。8歳と3歳の子どもがいて、1人は小学校に通っている。自分は通っていないから、子どもが学校に通っていて嬉しい。文字が読めないで、仕事が大変。学校で頑張って勉強してほしい。鳥インフルエンザで、ニワトリがたくさん死んでしまった。」	a.c.e.g
村人⑱⑲	一般夫婦	「タイ国境付近、2週間くらいに、とうもろこしの畑で働いている。文字は読めない。親としては、高校まで行ってほしい。でも、お金が高い。バイクがないと高校へ通学することが難しい。タイの出稼ぎで、お金がある家はいける。子どもの頃、学校に行けなかったが、子どもには行ってほしい。小学2年生の娘がいて、コロナの時は学校にいけなかったが、今は行けるようになって良かった。隣村の学校へ自転車で2キロ程の距離を通学している娘もいる。子どもは勉強が好きで賢いから、親として学校へ通わせたい。」	a.c.e.g